

0 ブラック・ノートについて

黒表紙のノートの詰まった段ボール箱を久しぶりに開き、溜息がひとつもれた。

どこから整理を進めたらいいのか、好奇心と億劫な気分が交錯している。

写真家の笠間保^{かさまたもつ}が南米のパタゴニアから消息を伝えてきて、およそ5か月になるだろうか。世界最南端の町ウスアイアの消印の入った小包だったが、船便で日数がかかっているせいか、荷物はうっすら潮の香を含んでいる気がした。

送られてきたのは、36冊のノートブックだった。表紙にあるのは番号だけで、タイトルはついていない。モレスキンの黒い表紙の分厚いB5ノートであることは共通しているが、わざわざリング綴じに加工した1冊や、赤のガムテープで背を補修してあるものも混じっていた。

さらに2か月後、沖縄の那覇から追加の荷物が送られてきた。同じモレスキンの黒表紙のノートが4冊だった。

とりたてて親しい付き合いのあった人物というわけではない。そもそも私宛に荷物が送られてきた理由も判然とせず、気色悪い気分すらあって、いったんは2箱とも梱包をほどいたが、手紙らしいものも見当たらないので、しばらく放置してきた。いずれも半透明のビニールテープでぐるぐる巻きの念入りな荷造りがしてあり、それがむしろ雑に見えて、廃物の風体だったせいが大きい。さらに最初のアルゼンチンからの小包が、新型コロナウイルスの蔓延^{まんえん}で引受停止になっているはずなのに、なぜ

か届いたという不可解な事情もあった。船便のゆるやかで、のんきな対応も微笑ましいと言えないこともないが、しばらく放置して滅菌を待つ気分が働いていた。

日数がたち、古雑誌を片付けていると、奥にひっそりと置きっぱなしの段ボール箱の処理が気になりだした。ウスアイアの箱からおおまかに目を通すと、創作ノートであることが判り、1冊目の表紙の裏に手紙も挟まれていた。Hotel Albatros と印字のある便箋8枚にボールペンで記してある。

こちらは夏です、といっても毎日うんざりするほど寒風が吹き続けていますけど。南極ツアーに出かけたいと思って待機しているのですが、何日もずっと気象条件が悪く、そろそろあきらめかけています。本当に行きたいのかどうかも、わからない気分になってきました。この先どこに向かうか、決めていませんが、日本には当分のあいだ戻らないでしょう。もっとも、その日、その時、どこにいるかは、自分でも予測できません。とにかく意地を張って、しかし何のための意地かあいまいのまま、無理やり動き回っている感じがあります。パタゴニアに来たのも、サン＝テグジュペリとブルース・チャトウィンの本をお借りしたことがきっかけですが、それだって漠然としたものです。

ノートの束、どっさり送ってしまいました。さぞかし驚いたことでしょう。おじゃまになることは承知のうえです。他の誰にでもなく、たくさんの本を貸してくださった大兄に、ぜひお読みいただきたいのです。面白がってくださるか、それとも「たわいない」と捨て置くか。どちらにせよ、妙な言い方ですが、ほどほどに穏当なとまどいがあ

るかもしれません。

なぜこんなものを書いたのか、立派な理由などまったくありません。振り返って考えると、大兄の書庫から自由に本をお借りできたことが大きなきっかけです。

もともと読書好きで、いつも何か読んでいないと活字への飢餓感がつのります。そうなるとう当たり次第に、薬の効能書きでもコンビニのおにぎりの食品添加物一覧でも、丹念に目を通そうとします。

父は埼玉のピーマン農家、母は中学校の国語教師でしたが、両親とも読書好きだったことも影響があるかもしれません。私は大学では哲学、それも地味なイギリス思想を専攻したのですが、ほとんど授業には出ず、気ままな雑読乱読だけで研究書など無縁でした。結局、単位は取れず、5年いて退学しました。写真学校に入ったのは、その1年あとです。カルチャー教室の創作のクラスにも通いました。こちらは私の文が悪例として紹介されるばかりでした。でも、自分で言うのも変ですが、けっこうそうした悪い見本になるのを楽しんでいました。

とにかく、本をあれこれ読むことほど、思いを掘り起こし、記憶を誘い出し、想像を刺激するといったような心の弾みを実感する体験はありません。そしてもっと深く読むにはどうしたらいいか。それは書こうと試みているときではないでしょうか。あまりうまく説明できないのですが、書くことは未知の何かを読んでいる感覚に近いのです。眠っていた記憶も、書こうとするとふいに浮かび上がったりして、それを読もうとします。書くという方法で初めて読めるものがある気さえます。

あえて言えば、読むことと書くことが、等質の気分として自分の中に住みつき、ちょっと、おおげさですが、習い性になったのでしょうか。さらに、この二つを続けるのに、旅こそふさわしいという事実を知ったのも、あの日に大兄にお会いしてからなのです。

ノートの雑文、乱雑な走り書きで申し訳ありませんが、読んでいただければ嬉しいです。もちろん、どのように読んでいただいてもかまいません。ただ、すぐに気づかれるでしょうが、ここには今日の困難な状況の深層に触れる話がたくさんあり、グローバルな危機と不安と分断の時代の表徴として、あたかもアンテナショップのように、時代の動向をキャッチするセンサーの役割をはたしている——などと、まさか言うはずもなければ、言えるはずもありません。こうした言い方を書きつけるだけで、ひどく居心地の悪い、何とも卑しい気分になってきます。日頃の大兄のお考え次第とはいえ、こうした私の気持ちを頭の隅に留めておいていただければありがたいです。

とにかくどうあっても、目を通した後はご面倒をかけますが、速やかに廃棄処分してください。特別な秘密などないのですが、それでも処分をお願いします——と、カフカではあるまいし、重々しく遺志を伝えることなどもしません。はっきり言って、どのように処理してほしいか、要望などまったくないのです。もちろん、廃棄していただいても一向にかまいません。いや、わざわざ処分などしなくても、ノートみずから勝手にどこかへ消え去るかもしれない。あれこれ何だかわけのわからないことを述べているようですね。やっかいごとを押しつけてしまい、申し訳なく思い

ます。お手数をかけますが、よろしくお願い致します。では、どうか、お元気でお過ごしください。長文になりました。妄言多謝。

笠間保拝

手紙はノートと同じく、細かな字で、判読するのに苦勞する箇所も多々あった。那覇からの小包も点検したが、「追加のノートです」と記した紙片があるだけで、手紙らしきものはなかった。

ノートの内容は雑記帳と言ってよく、完成しているのか未完成のままなのか、にわかに判断のつかない小説めいた文、評論、随想、身辺雑記、アフォリズム、引用文、メモ類が混在していた。これらの文章群を読むのは思いのほか面倒だが、まるで誘引物質でも吸うように、そわそわと落ち着きなく心動き、ひきつけられてしまった。最初のノートの冒頭に、次のような言葉が記してあり、思わず笑いが漏れてしまったことが、誘いの発端となった。

私は嘘つきやフェイカーが大嫌いだ。この連中は何かにつけてお気軽に嘘を繰りかえすことによって、ときに厳かなほど尊く、丁寧に敬意をもって遇すべき〈フィクション＝虚構・作りごと〉を愚弄しているからだ。

どこかで読んだような気もする文だが、嘘つきはフィクションを愚弄しているのだという断言に共感をおぼえた。

いずれにせよ、これらブラック・ノートの文章群を未完とか出来の良し悪しとかに関係なく、作品として扱っていきたい。どのような掌篇や断章でも、読んで何らかの感情を揺らし、思

念の振幅を促すものが、私にとっての作品である。

はたして笠間保とは何者なのか？ 実は、私自身よく判ってはいない。親のことも、哲学専攻で大学を中退したことも、手紙を読んで始めて知った。最初の出会いは、5年前、京王井の頭線の浜田山駅近くの不動産屋だった。

彼は親の農地売却の遺産で買った中古の利殖用マンションの管理委託の更新手続きをしている最中で、私は自宅にあふれた本を保管する賃貸物件の相談で店に立ち寄った。たまたま近くに居合わせた笠間は、私の所蔵する本に興味を示し、小声で話しかけてきた。

「すみません、私、世田谷の上北沢に住んでいる笠間と申しますが、少しお聞きしたいことがあるんですけど、いいですか？」

「ええ、けっこうですが、何か？」

「あなたが、一番大切にしているのは、どんな本でしょう」

と笠間は唐突に面接官のような口調で尋ねた。

「大切ですか？ いや、まあ、そのときどきで、変わりますけどね」と口ごもりながら答え、「強いて言えば、いつだっていま読んでいる本が、一番大切です」と付け加えた。

本当にそうだろうか。答えに怪しい気分が動いたが、いちいち正直に検討することでもなかった。

すかさず笠間は「じゃ、いまは何を読んでいるんですか」と聞いてきた。

「申し上げても、知らない本ですよ。『チェーホフの夜』という、私の書いた小説ですから。必要があつて、今朝から読んでいます」

「そうですか、本を書く方なんですね」と彼は短く応じた。

笠間は着古したこげ茶色の革ジャンパーを着ていて、話をしながら右手で襟元を直す癖があった。もみあげのあたりに白髪が目立つが、私よりも一回り若く、ちょうど還暦を過ぎたくらいの年齢に見えた。

「写真集は何かありますか？」

「ええ、それなりに。一番愛読している写真集は何か、お聞きになりたいんでしょう？」

「そうです。でも、写真集だから、読んでいる本というわけじゃないですよ」

「いや、写真集だって、読むものだと思いますよ」

笠間は笑いながらうなずき、メモを取る用意をした。

「『小屋の情景』という写真集です。山形の農家の物置小屋とか、隠岐島の漁師小屋とか、浜松の楽器工場の煉瓦の小屋とか、中古バスを資材置場にした長野の小屋とか、あざやかなオレンジ色に塗りこまれたスペインの鶏小屋とか……」

「いいですね、そういう本、大好きです。私もポルトガルの古ぼけた漁師の小屋の撮影経験があります。コナン・ドイルの『緋色の研究』がヒントになりました。私は写真の仕事をしている者ですが、〈錆色さびいろの研究〉とタイトルだけ真似をして、錆ついたドラム缶とか、トタン塀とか、鉄錆の浮いた扉とか、錆色の廃物ばかり写真を撮ったことがあるんです」

「で、写真集にまとめたとか？」

「いやいや、私の場合、そういうタイプの仕事とは違います。スーパーのチラシとか、飲食店のサンプル用の料理写真とか、映画のスチール写真とか、もっばらそういったものを撮っています。で、ご相談があります」

笠間はいったん席をはずしていた不動産手続きの担当者と呼

び寄せた。最初は途惑いの表情を浮かべていた若い社員は、事務的な態度を作り直し、笠間の指示に従った。

笠間は2LDKのマンションの1階空室を、書庫として私に半額の家賃で貸す提案をしてきた。代わりに、蔵書を図書館のように利用させてほしいというのだ。貸出用のノートも備えるという細かい約束まで口にした。

こうした家主と店子の親密な関係が始まって、笠間との直接的な交流はほとんどなく、書庫で顔を合わせることもなかった。貸出ノートを覗くと、律義に貸出日、返却日を書いてあったが、1年もすると記載も気まぐれになった。貸したまま返ってこない本もあり、逆に返却記録がなくても、棚に戻っていることもあった。

笠間との蔵書の貸借契約は、当初からやや気詰まりなところがあったが、借りていった本とブラック・ノートとの間に密かな関係のある今となっては、好奇心がじわりと動く。読んだ本はオレンジ色の付箋を残していたので、見つけやすかった。貼り方に縦と横の区別があったが、その区別の法則性はよくわからない。

書庫の賃貸契約は3年ほど続いたが、ある日、不動産会社を通して打ち切りの連絡があった。当の3階建て9世帯のマンションは老朽化のため取り壊しの計画である、と。1か月ほどかけて本の引越しを終えたときには、すでに笠間の所在はつかめなかった。契約解除の法的書類からして実に不可解なのだが、不動産屋にも旧住所の記録がなく、行方不明も同然だった。私の蔵書は神田川沿いのアパートに移動した。住まいとは川をはさんだ真向かいの場所となり、使い勝手はよくなった。

消息が掴めない程度のもので、遺稿などと呼んではいけないのであろうが、なぜ笠間は形見のように何冊もの創作ノートを

私に送ってきたのか。最初のノートの表紙裏に添えてあった書き付けに、短く理由らしきことが書いてはあったが、納得するほどのものではない。「ほどほどに穏当なとまどい」に何か意味が絡んでいるのだろうか。

いちべつ
一瞥しただけで閉じてしまった段ボールの中を改めて覗いていくうちに、秘め事に触れるような後ろめたさと好奇心が入り混じって私に取り憑いた。「パンドラの箱」とまで言うのは大仰だし、そもそも災禍の元が飛び散るわけでもないだろう。しかし、勝手気ままに送りつけてきた意図が何であれ、想像の触角を伸ばす剥き出しの好奇心に我ながら驚いた。それでも期待したほどの内容ではないと判断すれば、あっさり廃棄を決めるかもしれない。もはや箱を開けた以上、とりあえずこの遭遇ぎようこうを僥倖えいせいと思うことにした。

同時に、私にはとりたてて関心のなかった笠間保の生い立ちや私生活の様相を垣間見ることもあるだろう。その共鳴作用で私自身の未知の感情や眠っていた記憶が誘いだされる意想外の経験が待ち構えているかもしれない。

笠間保のノートブックに残された雑記を含めた「作品」の紹介をこれから試みる。ただし、1冊目から順に追って調べていく研究調査を真似るような網羅的作業をするつもりはないし、その必要もないだろう。文献解題風に記すこともあれば、ごく簡単な紹介や感想とか、ただ引用文だけを写し取ることもある。いずれにせよ、その日の気分のおもむくまま、私自身の関心に応じたものになるだろう。笠間保にとっては、不本意な試みかもしれないが、いわばブラック・ノートの読書ノート化である。

ノートには日付がなく、表紙に(1)から(30)までの番号が入っていて、それ以降は記載がない。したがって、(31)から(36)は便宜的に私が番号を振った。各冊にはページ番号が入っているが、31冊目以降は書かないことが多く、これも私の方で書き入れた。沖縄から届いたノートは(1)から(4)と番号が付いているが、通読の都合上(37)から(40)と通しナンバーにした。当初の几帳面な小さな字も、こちらの4冊は走り書きに近く乱雑な筆記に変っている。内容面の変化はまだ判断がつかない。なお、ノートの各文にはルビはいっさいないが、紹介にあたっては適宜振った。

導入文、全文引用または〈あらまし〉、そして〈寸感〉といった構成を主とするが、〈あらまし〉はなるべく書き手に憑依ひょういするようなスタイルで記した。その方が原文の手触りと余熱のようなものを感じられると思ったからだ。

1 「心中の声」に耳をすます (40冊目、最終ページ)

本を選ぶとき、しばしば「あとがき」を先に読んだりする習慣に似ているが、ブラック・ノートも、まず最終巻の最後のページを開いてみた。タイトルのないアフォリズム風の文章が載っている。

作中人物もまた作品の外の物音に耳を澄ましているのだ。ある小説を読者が読み出すや否や、いやむしろ読むことによって初めて、登場人物は外部の音にめざめ、読者の声を

聞きとれるようになるのである。読者の心中の声すら聞こえるときもあるぐらいだ。

出典は書いていないのだが、どこかの本からの引用のように思う。おぼろげな記憶ではあるが、小説ではなかっただろうか。先に述べたように、笠間は読んだ本の印象的な箇所にオレンジ色の付箋を貼っている。見当をつけてその跡をたどったが、確認できなかった。私の思い違いだったかもしれない。

いずれにせよ、まず最終ページを覗くことを笠間が予期していたとすれば、どのような意図が働いていたのだろうか。仮に何か企みがあったにしても、私が当人に伝えなければ意味がない。ましてや、読まずに廃棄する可能性だって想定できたはずだ。

もしかしたら、私がこのようにブラック・ノートを読み、その抄録を試みることを笠間は見通し、確信していたのだろうか。実際、その通りの成り行きになったのだが。

どこをどのように読むかまだ判らないが、登場人物が私の「心中の声」に耳をすましているとなると、いささか不気味で、文字通り心中は穏やかではない。しかし、笠間には申し訳ないが、私が興味を感じて取り上げる文章は、そうそう簡単に私の「心中の声」など聞き取れるはずはない類のものだと思う。だが、はたしてどうなのか。

2 破り捨てられた一枚 (1冊目, 21ページ。裏, 22ページ)

新聞がポストにさしはさまれる音で目が覚めた。朝刊ではな